

ほなひ歴史通信

第105号

2022(令和4).12.1

新聞記事調査を通して戦争の悲惨さを改めて思う

現在、大子町歴史資料調査研究会が『大子町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録』(三)の刊行に向けて鋭意調査を進めていることは、本誌第九九号で藤井達也さんが述べている。調査の対象時期は昭和一三年(一九三八)から二〇年までの八年間、日中戦争からアジア・太平洋戦争に連なる、まさに戦争の時代である。筆者は一三年から一五年、そして一九年と二〇年、合わせて五年分を担当している。「いはらき」新聞(二七年二月一日付から茨城新聞に改称)縮小判のコピーから大子地方や久慈郡の記事を探し出し、その表題をパソコンに打ち込む、小さくて不鮮明な活字に目を凝らして記事内容を読み込み編者注記を付す、そうした作業を繰り返している最中であつた。

二月二四日、ロシア軍が隣国のウクライナに軍事侵攻し、プーチンによる戦争が始まった。以来、ミサイルが撃ち込まれ、都市が破壊され、ウクライナ市民が殺害される様子が様々な媒体を通して伝えられている。目を覆いたくなるような破壊と殺戮の連続である。開戦から九カ月以上たった現在も、停戦の兆しはない。

戦時下の新聞記事調査を進めるなか、映像や記事で伝えられるウクライナでの戦争の実情に接すると、とても他人事とは思えない。命を奪った。同時に、日本人兵士や民間人の命も失われた。ウク

ライナでの悲劇がかつての日本と重なってみえ、調べている記事の内容が一層胸に迫ってくる。とくに、戦没者の記事を読むと。

昭和一二年七月に始まった日中戦争以降の軍人・軍属の戦没者数は約二三〇万人といわれる。そのうち九割弱に当たる二〇一万人が昭和一九年一月一日以降だとの推計がある(吉田裕『日本軍兵士―アジア・太平洋戦争の現実』)。当時の茨城新聞を読むと、大子地方に限定しても、確かに一九年以降は戦死や戦病死した兵士を伝える記事が多くなる。「噫 尽忠・海の勇士」「英霊凱旋」「英霊還る」「征戦遂行尊き人柱」「無言の凱旋」「草むす屍」等々、記事の見出しは様々だが、戦没者の出身町村、氏名、階級が記載されている。時には、「各勇士の家庭」との見出しで家庭環境が紹介される。例えば袋田村出身藤田兵長の場合は、顔写真入りで、一人息子であつたこと、若い妻と四歳の幼子が残されたこと、「郷にあつては模範青年で柔道を好み初段の腕前、陣中でも藤田兵長の柔道は大いに聞えてゐた」ことが記されている(一九年六月一日付)。

顔写真と言え、昭和四〇年八月一五日付朝日新聞の「天声人語」が胸を打つ。一三年当時長野支局員だつた筆者の体験談が綴られる。戦死の入電があると「支局員は自転車に乗って、戦死者の家庭を回り、写真を借りる。つらい仕事だつた」。ある農家で一枚きりの写真を借りて「自転車に乗ろうとすると、老母はとつぜん荷台をつかんで、必死のこえでさげんだ。『記者サ、おまえサなにかかくしているでねえか。セガレが死んだなら死んだと言ってくれや。天皇サマにあげたいのちだ。泣くこたアねえ、泣くもンじゃねえ：おら、泣きやしねえ』／こう言いながら老母は泣き、まっさおな顔で、自転車をつかんでほなひはなさない。：記者もなみだをこらえきれず、立ちすくんだ」。茨城新聞社の記者も、同じような体験をしたのだろうか。一枚の顔写真からあれこれ想像する。ウクライナでの戦況の推移に刮目し、戦時下の大子地方に思いを馳せながらパソコンへの入力作業を続けている。(齋藤典生)

道標調査から見えてきたこと

成井重美

大子町郷土史の会に参加して、令和二年（二〇二〇）から三年間をかけて大子地方の道標調査を行った。大子郷土史の会編集による『大子の石仏―石仏・石塔調査報告書―』（大子町教育委員会発行）などに紹介されている道標をベースに、新たに見つかったものも含めて、現在大子町で確認されている九十一基の道標のうち、行方不明の七基を除き八十四基の道標の拓本をとった。

道標は道路の辻や分岐点、山中や峠などの路傍に、行き先の方角や距離を示すために設置されたものである。種類別にみると道標専用の道標が三十七基、残りの五十四基は信仰と結びついた文字塔に道標銘を併用した碑であり、多いものから馬頭観世音碑、庚申塔碑、念仏供養塔碑、道祖神碑などのほか、様々な信仰塔があることがわかった。建立年代が確認できる最古のものは約二百年前に建立された頃藤の横石にある道標である。これ以降、江戸時代中期の享和三年（一八〇三）までに十四基、江戸時代後期の慶応元年（一八六七）までが二十五基、そして明治時代以降が十四基あり、年代不明が三十八基あるが、その多くが江戸時代に建てられたものと思われる。碑をみると、昔は様々な民間信仰があつて、多様な祈りの場であるとともに、地域住民の絆を深める場であり、娯楽の場でもあつたことがうかがわれる。旅人が道に迷わないよう道案内の役割も果たすよう配慮していた。旅人が道標に出会うとじっと手を合わせて旅の安全を祈る姿が偲ばれる。

ところで大子地方は、周りが山で囲まれた山間地で、山あいを久慈川が北から南へ蛇行しながら流れ、その支流である中小河川が流れるという盆地のため、道路の発達を妨げていた。江戸時代の河川にはほとんど橋がなく、川原の近くや狭い谷川に沿った道、

川を渡る危険を避けるために迂回して山の尾根などを利用するなど、外との往来には必ず峠を越えなければなかった。それらの峠には、人馬の通行に危険を伴う道が多かった。このため、大子地方や大子地方と境を接する地域には道標が多いことが確認できた。

点在する道標を線で結ぶと道が見えてくる。例えば、八溝峰神社と坂東三十三観音二十一番札所の日輪寺がある八溝山と、二番札所のある常陸太田市佐竹寺を結ぶ黒沢―下野宮―生瀬の巡礼の道に「やみぞ」と「さたけ」を示す道標が二十基以上もある。また、下金沢、相川や栃原新田などには栃木県大那地を経て鷲子山上神社を示す道標が目立つ。逆に、常陸太田市や栃木県的那須町、旧黒羽町、旧馬頭町などに八溝を示す道標が数多く存在する。

また、江戸時代に往来があつた峠道を挙げてみる。一つは、旧美和村境のタバッコ峠から栃原に入り、僧侶の姿を線で刻んだ道祖神碑（町指定有形文化財）のある栃原の横屋から、高萱峠を越えて大子や現在の上岡に出る道である。上岡から先は馬頭・黒羽方面や浅川につながる。二つめは、浅川と冥賀の境を通る長峰峠である。この道は「馬頭ヨリ芦ノ倉を経て上郷エ出八溝山ニ至」〔常陸国北郡里程間敷之記〕る道で、長峰峠の茶屋ヶ峯には東西南北の各地域を示す道陸神の道標がある。この道は水戸藩二代藩主光圀や九代藩主斉昭も領内巡村で通った重要な道であつた。三つめは、上郷の宮本集落と中郷の権現堂を結ぶ稜線にある月柄峠である。ここに建てられた道標は、奥州各地の地名と距離を刻み、遠くは仙台、塩釜までの距離を示している。この二つ目と三つめの峠道は昔、野州方面や奥州方面を結ぶ街道として賑わつた。

時代が変遷する中で、道標もその存在が忘れ去られ、案内板が設置され日の目を見ているものがある反面、路傍に倒れているものや草むらに埋もれているものも見られる。道標はそれぞれが個性的で価値があり、地域の宝として認識され、歴史的文化遺産として評価されてもよいのではないか。

（大子町上岡在住）

名称「奥久慈」の由来を考える

下重康男

「奥久慈」という名称について、永い間気にかかっていたことがある。大子生まれ大子育ちで郷土史にいささか興味のある筆者にとつて、就職するまでは「奥久慈」よりもむしろ「保内郷」の方が聞き慣れた名称であった。

筆者が育った大子町下野宮では、県境を越えた福島県は「奥州」という名称で呼ばれることが普通であり、子供の頃は、「奥州へ泊まりに行く」、あるいは「奥州へ遊びに行く」と言っていた。福島に行くとは言わず、「奥州」に行くであった。今では懐かしい言葉遣いであるが、「奥州」の名称の起りは承知している。

筆者は昭和四十二年（一九六七）に地元の大子町農協に奉職し、主に営農経済事業に長く携わってきた。就職した当時、日本経済は高度経済成長の最盛期、人も物も全てが東京へ、東京へと押し寄せた時代であった。その当手を振り返ると、例えば京浜市場で大人気を博した「奥久慈胡瓜」のように、農協扱いの園芸農産物には必ず「奥久慈○○」の名称が付けられ、市場へ送られていた。

私が「奥久慈」という名称に初めて出会ったのは、昭和三十五年のことである。小学校六年生の時に、郷土史家故石井良一先生の講演を聴く機会にめぐまれた。その時の演題が「奥久慈膝くりげ 本の紹介と八溝山」であった。この講演をきっかけにして、以来郷土史に興味を抱くようになったので、講演のことは鮮明に覚えている。また、高校三年生の時に男体山に登った。そこで、明治の文豪大町桂月の歌碑を見る。そこには、登山道途中にある弘法堂の高台からの眺望絶景に感嘆して大正六年（一九一七）夏に詠んだ歌で、「久慈の奥男体山を仰ぎ見て画を学ばむと思ひけるかな」とある。「奥久慈」とは表現していないが、まさに「久慈の

奥」とは「奥久慈」のことである。

さて、この名称「奥久慈」であるが、いつ頃、誰が、どのような意味を込めて用いたのであろうか。また、どの範囲を示すものなのであろうか。筆者なりに説明しようという資料を探索してみたが、納得のいく答えは見出せなかった。少なくとも「奥久慈」の範囲については、大子地方教育会が編纂した『保内郷要覧』（昭和二十七年刊）に「奥久慈所謂保内郷の地域」との表現があることから、保内郷と重なるものと思われるがどうだろうか。

ところで命名者であるが、ひよんな事から判明した。郷土史に造詣が深く、大子ジャーナル新聞社編集長を務める小室久さんに、以前、「奥久慈」の名称の由来について伺ったことを思い出した。今回確認のため再度尋ねてみると、早速ご教示を得た。命名した「御仁は、西金出身のペンネーム霞五郎さんだよ」と。小室さんは、ご本人と対談した折に直にそう聞いたと言う。今から九十数年前の昭和三年頃、東京都下の奥多摩を霞氏が何かの縁で訪れた時に、その奥多摩の情景が久慈川の清流や山稜、風土、人情味等々においてふるさと保内郷とそっくりだと感銘したことから、久慈川の奥、すなわち「奥久慈」と名付けたというのである。

「ペンネーム霞五郎」とは、六代目の下小川村長神長道太郎の弟で、本名は神長謙五郎である。法政大学卒業後に報知新聞等の記者や西金郵便局長を務め、戦後は主に執筆活動を通じて活躍した人物である。霞の著書『保内郷土誌 おらが在所』（昭和二十七年刊）では、「観光篇」で「奥久慈ハイキングコース」を紹介している。これは、「昭和十一年に東京鉄道局が、一般向のコースを募集したとき、みごと一位の選（霞五郎案）に入った」二八・七キロのコースである。名称「奥久慈」が冠せられた一例である。

かくして、先に述べた私の疑問は氷解した。今や、名称「奥久慈」は大子地方の別称とも言えるほどに一般化し、定着していると評してよいだろう。

（大子町下野宮在住）

大子町・鎮守の杜（一三）

関戸神社（大子町頃藤六五〇六）再訪

高根信和

関戸神社については、本誌第八七号ですでに紹介したことがある。その際本殿については、覆い屋で保存策がとられているため外からは見ることができない、と記した。また関連して、境内に建立されている石碑「神恩謝之誌」に、「本殿は江戸中期、桧板葺の流造方一間で数多くの彫刻は狩野派の画風に莫大な金銀の極彩色を施した当地まれなる文化財である」と刻されていることを紹介した。

令和四年九月、大子町教育委員会の担当の方から連絡があり、地元頃藤の氏子総代等の要望もあって関戸神社本殿の調査について宮司から了解が得られたので調べてもらえないか、との依頼があった。古建築の専門ではないのでお断りしたが、本殿をこの目で見るができるまたとない機会だと思い、結局引き受けることにした。

同月二十一日、菊池宮司、氏子総代の方、町担当者、それに私の五名が関戸神社に集まった。調査にあたり、宮司による一連の祭式が行われた。先ず号鼓から始まり、修祓、開扉、献饌、祝詞奉上、玉串拝礼、撤饌、閉扉、号鼓と続いた。祭祀を終え、宮司の案内で一同は本殿へと進んだ。

本殿は流造り、向拝付、板葺きの上が銅板で覆われている。正面と側面の三方に縁を廻らし、正面に五段の木階を有し、浜縁を置いている。

本殿を拝見する。全体が漆塗りで、朱色の木組みのなかに数々の彫刻類がほどこされている素晴らしさは、まさに目を見張るばかりであった。本殿の正面の板扉は黒漆、ここに色彩で何が描か

れているのかは不明で、両方の柱にはわずかに金箔押の跡が残っている。板扉の塗装は剥落が甚だしく、先に紹介した「狩野派の画風」、文様彩色は欠失していて確認することはできなかった。彫刻は額縁付透かし彫刻で、東面には亀と賢人、背面に猿と賢人、西面に鶴と賢人が刻されている。

本社は、県北地方の神社の建築規模としては標準的なものであるが、しかし本殿に見られる彫刻は秀逸であり、貴重な文化財であることは間違いないと思われる。今後、古建築の専門家による調査や色彩等の科学的分析を経て、なるべく早いうちに修復が叶うことを期待したい。

（水戸市在住）



関戸神社全景 令和4年9月撮影

明治の太子町三小学校同時改築（前）

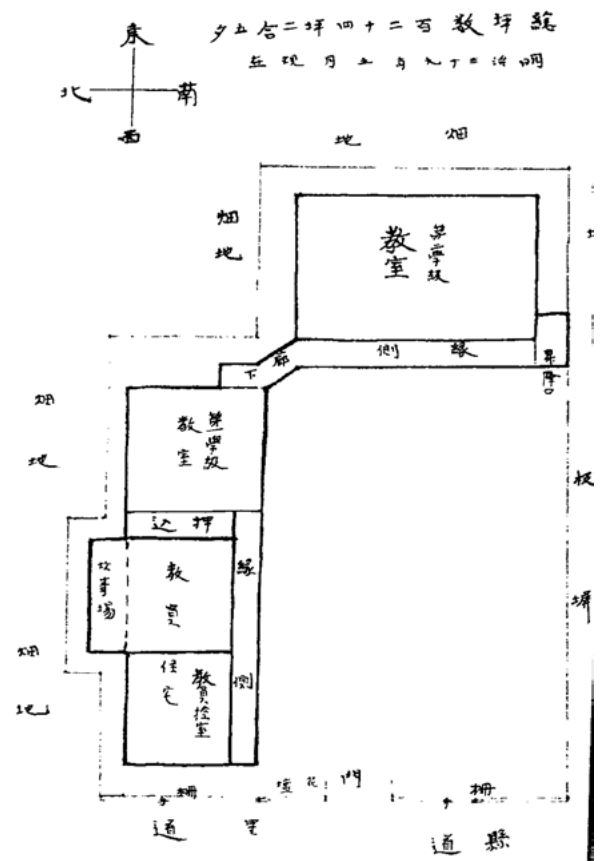
大金祐介

明治四十年代のことである。太子町は、ある行政課題への対応を迫られていた。それは、小学校校舎の狭隘化だった。

小学校は、明治五年（一八七二）の学制の公布により、全国各地に設置された。当初は、就学率が低かったが、就学の奨励、尋常小学校への就学の義務化、授業料の無償化などにより、三十年後半には、就学率が九割に達した。このような状況を受けて、四十一年度から、義務教育期間（＝尋常小学校の就学期間）が、四年から六年に延長された。

就学率の向上と義務教育期間の延長は、喜ばしいことであったが、太子町は、それによって、小学校校舎の狭隘化という行政課題を抱えることになった。当時、太子町は、太子尋常高等小学校、上岡尋常小学校、浅川尋常小学校の三小学校を設置していたが、いずれも折からの人口増加や就学率の向上により、校舎の狭隘化が進行していた。そのような状況のなかで、義務教育期間が延長され、児童数が激増したことから、校舎の狭隘化は、より深刻さを増し、解決しなければならぬ行政課題となったのである。

上岡尋常小学校の学校沿革誌には、校舎の狭隘化をうかがわせる記録が残っている。図に見るように、明治三十九年五月当時、同校は、総敷地面積が約百二十四坪で、そこに約六十坪の校舎が建ち、約六十坪の運動場が設けられていた。教室数は二室で、第一学級教室が十坪半、第二学級教室が三十一坪半であった。これに対して、三十九年度の児童数は八十六人であった。前述の二教室に八十六人の児童を収容していたとすると、児童一人当たりの教室面積は、単純計算で〇・五坪弱、すなわち一畳弱ということ



上岡尋常小学校（明治39年5月現在）

になる。授業に支障をきたしていたのではないかと疑われるほどの狭さである。その後、児童数は、義務教育期間が延長された四十一年度には百二十五人、六年年がすべて揃った四十二年度には百三十人に達し、校舎の狭隘化がさらに進行した。

校舎の狭隘化を解決するためには、校舎の改築が必要であった。しかし、当時の町村は、財政基盤が脆弱で、財政的な余裕が無かった。太子町もまた同様であった。明治四十年代における太子町の歳出に占める教育費の割合は、四割から五割で推移していた。太子町は、校舎の改築どころか、小学校を維持するだけで精一杯というような財政状況だったのである。

厳しい財政状況のなか、三小学校の校舎を改築し、校舎の狭隘化を解消しなければならぬ。このような極めて困難な行政課題に挑んだのは、時の太子町長益子彦五郎であった。

（太子町太子在住）

【保内衆の戦国時代(1)】頃藤城主小川氏と南奥地域(上)

戦国時代、大子地域(保内)には多くの武士が存在し、各地の拠点となる城を中心に、勢力を築いていました。保内を手中に入れた佐竹氏は、こうした武士を「保内衆」として編成し、彼らを通じて地域支配を実現しました。本シリーズでは、代表的な「保内衆」を取り上げ、その動向から戦国時代の大子を描き出します。

頃藤の久慈川蛇行地点に築かれた頃藤城は、十六世紀初頭から、小川氏の拠点であったと考えられます。残念ながら、同氏の地域支配に関わる史料はほとんど残っていません。しかし、佐竹氏のもと、南奥地域(陸奥国の南側、現福島県域等)で活動する小川一族の太蔵丞(おおくらのじょう)の姿が、古文書から確認できます。

永禄八年(一五六五)に義重が家督を継ぐ頃、佐竹氏は常陸南部への進出と並行して、南奥地域への侵攻も進めていました。永禄十年には、一時的に南奥の小川氏との間で協調関係が築かれすが、同十二年には再び対立が始まります。次の書状は、その翌年に、佐竹氏の従属下にある南奥武士の道堅(石川晴光)から、佐竹氏重臣の和田昭為(あきため)と小川太蔵丞に出されたものです。

昨日も申し伝えましたが、重ねて只今方々から申し伝えてきたことがあるので、お伝えします。昨夜は大雨で取りやめになりましたが、今夜は必ずあなたがたの元に何かが起こると申しています。白川の北境の衆が、赤館城に向かいました。それを見かけた者が来て、詳しく申しております。寺山で先日捕まった足軽の内二三人が、しっかりと白川氏に通じております。その足軽が申していることがあったので、そちらまで向かい、しかと聞き取りました。そうしたところ、寺山城近辺に入っている草(忍び)が城外に討つてでると、草の者たちは敗けて退く動きを見せながら、方々に仕掛けを施してから戦いに及びます。入れ替わりに別の者

が城内に侵入し、火を付けると申し合わせているとのことでした(後略)

五月十日 午剋(午前零時前後) 道堅(花押影)

小大(小川太蔵丞)

和田殿(和田昭為)

(永禄十三年カ五月十日「道堅書状写」、秋田藩家蔵文書五)

この頃、小川太蔵丞は、和田昭為とともに寺山城(現棚倉町)に入っていました。道賢が捕えた足軽を尋問したところ、城内外に白川氏に内通する草の者がまぎれこんでおり、戦闘が始まったら撤退するふりをして城に火をつけるといふ軍事機密を暴露しました。そこで、慌てて本書状を送ったのです。緊急のため、通常は記さない差出時刻まで書き添えています。緊急連絡を受ける相手として、小川氏の名前が出てくることから、同氏は寺山城の留守居の中でも中核となる存在であったことがうかがえます。太蔵丞はこの時の活躍が認められたようで、同年六月二十三日に、佐竹義重から、赤館城(現棚倉町)を確保した暁には、三森・小菅生(いずれも現白河市)の二ヶ所を与えることが約束されています。

この後も白川氏との衝突は続きます。これに関連して、当主を支える役割を持つ佐竹一族の南義尚(よしひさ)と東義喬(よししたか)が出した小川氏宛の五月四日付書状二通が残っています。これらは元龜三年(一五七二)のものとして推定され、次のような記述が見られます。「あなたの差配をもって、堅固な処置が行われ、結果として多くの敵を討ち取ったのは、誠に比べようのないものです」(南義尚)、「その地で敵と遭遇して、ことごとく攻め破られてしまったでしょう。それでも味方が力を合わせて押し返し、多くの敵を討ち取ったとのことで、誠に心地よく感じています」(東義喬)。劣勢に陥った軍勢を、小川氏の差配で立て直し、敵を多く討ち取ったことが称賛されています。小川氏は南奥地域の最前線を任され、その期待に応えるだけの活躍を見せたのです。(藤井達也)

只見線の復旧に想うローカル線の魅力

十月一日、福島県会津若松市と新潟県小出町を結ぶ只見線の一部不通であった区間が復旧し、全線開通の運びとなった。

不通となっていたのは、十一年前の平成二十三年（二〇一一）の東日本大震災の発災から四か月後の新潟・福島豪雨により、三つの鉄橋や線路が流され甚大な損害を被った只見町の只見駅と金山町の会津川口駅間の二十七km余りの区間であった。

奥久慈地域にどことなく似ているという自分なりの思いからだろうか、以前から奥会津地方や只見線に関心のあった私にとつては、不通であった区間が十一年もかかって復旧されたことが驚きであり、鉄橋が流された水郡線ともオーバーラップしてみえた。

報道によれば、この区間はもともと赤字であった上に、復旧に多額の費用を要することから、一時は被災区間の廃線も検討されたようである。しかし、復旧費用の一部と維持管理費用を負担しなくても災害前と同様に運行してほしいと地元自治体が要望したことで、六年に及ぶ話し合いと四年余りの工事期間を経て、復旧が実現した。復旧後のこの区間については、列車の運行は鉄道事業者が担当し、線路や駅舎の維持管理は福島県及び会津地方十七市町村が担うという「上下分離方式」で運営されることになった。

こうした自然災害からの鉄道の復旧事例を調べてみると、東日本大震災の三陸鉄道、水郡線と同じ台風十九号で鉄橋が損壊し、水郡線と同時期に復旧した長野県の私鉄上田鉄道別所線等の例が挙げられる。いずれも、地元の熱い想いを背景に復旧をなし遂げた事例であるが、熱い想いをもってしても復旧かなわずそのまま廃線となった路線があることも事実である。

十月一日の記念すべき日には、始発列車の車両トラブルというハプニングもあいまって、マスコミ各社の報道も山間部のローカ

ル線のものとは思えないような過熱ぶりであった。全国から「乗り鉄」、「撮り鉄」が訪れ、大変な活況を呈したようである。コロナ禍以前から、この地域には多くの観光客が訪れていた。只見川沿いの渓谷を縫うように走っている只見線は、国内屈指の風光明媚な路線として知られ、また、点在する家屋等の風景は、日本の原風景を思い起こさせるものである。地元の写真家の方が、ソーシャルネットワーキングサービスを通じて継続して情報発信したことがきっかけで、多くの外国人観光客が訪れるようになったのである。第一只見川橋梁が撮り鉄たちの絶好の撮影ポイントになったのも、この地元からの発信によるところである。

十年ほど前になるうか、只見町にある河井継之助記念館を訪れたことがある。河井継之助は司馬遼太郎の作品「峠」の主人公であり、長岡藩家老として幕末に薩摩長州連合軍と戦ったことで有名な人物。今年、「峠 最後のサムライ」として映画化、上映された。只見町は、河井の終焉の地である。今回の全線開通のこともあり、久しぶりに奥会津地方を訪問してみたくなった。塩原経由で、道の駅巡りをしながら目的地地へ向かった。金山町の道の駅で昼食を食べ、隣接する東北電力の施設から只見線の鉄橋が見えたが、係員の方から、「次の列車までにはしばらく時間ありますよ」と言われ、時刻表を見ると水郡線に比べずっと本数が少なかった。

鉄道は、人員物資を目的地に輸送する重要な社会基盤であるが、只見線や水郡線等の地方ローカル線はそれ以上に地域のシンボル、地域住民から愛される存在ではなからうか、と私は思う。

十一月初旬の夕刻、西金駅から大子駅まで久しぶりに水郡線を利用した。通勤、通学客の利用する時間帯なのに、以前に比べ利用客が少なく感じた。過疎化、少子化の波はここまで押し寄せている。だが、今年のような美しい奥久慈の紅葉は、多くの観光客を水郡線へといざなうのではないだろうか。只見線にも負けないポテンシャルを有する水郡線に私はずっと乗り続けたい。（神長敏）

大子の今昔 写真帳

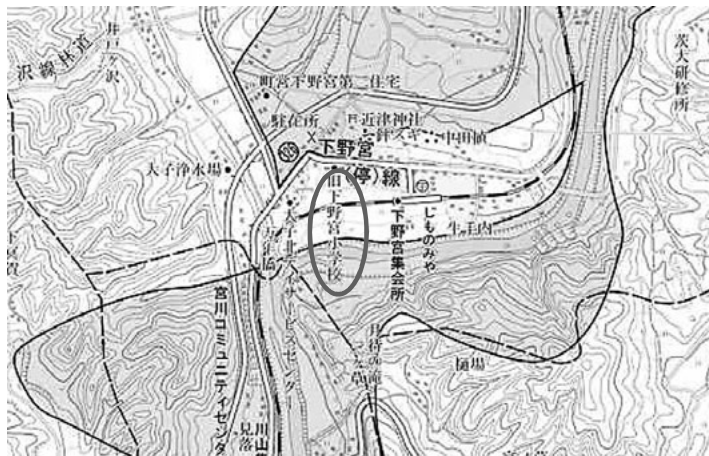
No.8

下野宮小学校の変遷

- 明治6年 近津神社の土地の一部を借用し創立
昭和19年 新校舎建設
昭和39年 新校舎完成
昭和59年 体育館竣工
平成2年 プール竣工
平成22年 閉校

それぞれ昭和30年頃、平成29年頃に上空から撮影された写真です。戦争による物資不足に苦しむ最中の昭和19年に新校舎が建設された点が特筆されます。

(大金真理子)



昭和19年建設の校舎（昭和30年頃撮影）



閉校後の校舎・体育館・プール（平成29年頃撮影）

発行日	発行	編集人	編集
二〇二二年（令和四）十二月一日	久慈郡大子町大字池田二六六九番地 大子町教育委員会	齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員） 藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員） 飯村 尚史（大子町教育委員会事務局） 神長 敏（大子町教育委員会事務局） 江尻 将崇（大子町教育委員会事務局）	大子町歴史資料調査研究会
☎ 0295(72)1148			